

宗青圖書公司印行

資治通鑑索引

漢學索引集成
蔣致遠主編

東洋史研究資料叢刊之3

資治通鑑索引

佐伯 富 編

1974

資治通鑑索引

佐伯富編

中華民國75年5月初版

出版者：宗青圖書出版公司

發行人：蔣致遠

發行處：宗青圖書出版公司

台北郵政22034號信箱

電話：(02)941-4553

郵政劃撥第0119411-8號

局版臺業字第1825號

精裝1冊

定價新台幣500元

舊 版 序

胡三省是於宋理宗寶祐四年（西元1256年）開始着手注釋資治通鑑，脫稿之後的景炎元年（1277），他的故鄉浙東地方受到蒙古伯顏軍的鐵蹄蹂躪，非常不幸的，稿本就失此失落。亂後，又再銳意製作，到元世祖至元二十二年（1285）終告完成，此書可說是前後花費三十年的苦心結晶。

胡氏這本著作，是參考了包括史炤通鑑釋文三十卷的宋代種種注釋本。他曾一一訂正史炤釋文的謬誤，另著有通鑑釋文辨誤十二卷，書中對舊注作了極嚴正的批評，所以，他在採用此書時，以求所有注釋都為正確。除了這些注釋本以外，他也引用了許多如宋白續通典等的佚書，這些書籍中與唐末五代有關的部分，具有和通鑑本文同為根本資料的價值。胡氏所採錄的並不僅是訓詁部分而已，他還簡明扼要地解釋了書中的名物、制度、掌故及地名，可說是史學注釋的範本。尤其是三國志以下的歷代正史，幾乎都沒有注釋，所以要研讀這些正史時，一定要參考這本珍貴的書。

對研究中世史的人而言，通鑑胡三省注可說是座極大的寶庫，但其注釋散見於二百九十四卷的通鑑本文各處，沒有能夠輕易利用的方法，這是研究中國史者最感遺憾之處。

隸屬人文科學研究所東方部的東洋史專攻者，組織了資治通鑑組，在會讀隋紀、唐紀、五代紀部分時，文學部的佐伯教授在五位同學及東方文化研究所的資援協助下，準備將1939年脫稿却被擱置下來的資治通鑑本文及胡注索引的原稿，儘快將稿本以原來形式予以油印，以資利用。後來，宮崎、安部兩教授及藤枝副教授分攤捐款，平岡教授也動員了唐代文集索引組的組員，貢獻出科學研究費，以協助印刷，結果短期內就完成了懸置已久的通鑑

索引印刷，真是令人喜出望外。在這裏，要特別感謝佐伯教授及提供協助的各位同學。同時，此稿本將來還會隨著通鑑組事業的進展，繼續作補訂工作，希望各位博雅之士隨時予以指正，以期能出版更為完美的版本。

1950年2月

貝塚茂樹

新 版 序

獲悉本書編者佐伯富教授等人，計劃編纂資治通鑑索引的消息，距今已有二十餘年。我的同事們鑑於此書將為學界帶來若干方便，遂於十餘年後的1950年，協助刊印本書的稿本。當時日本仍處於敗戰的創痛中，要以活字印刷刊印是不可能的事，只能以油印印在粗紙上。雖然如此，本書仍然大受學界歡迎，即使沒特別作廣告，仍陸續銷售出去，直到銷售一空，還是有人訂購，為了拒絕訂購，還得費番心思哩！記憶中，我曾因為某大學的殷殷懇求，而將抄寫的唯—副本割愛出去。後來，因為各方人士對本書的要求愈來愈強烈，經過十年之後，印刷新版的機會終於到來。承蒙哈佛大學燕京所提供基金，及東方學研究日本委員會的大力援助，本書即將以最理想的形式重新問世。對於知道本書來歷的人而言，將會為這種新裝本的出現衷心感到高興，但也會有無限的感慨吧！

恩師桑原鷺藏先生對資治通鑑極有研究，曾經仔細反覆讀過好幾次。他去世後，龐大的藏書悉數捐給京大東洋史研究室，唯有老師生前愛不釋手的山名本資治通鑑，當作家寶般留置在其宅中，那本書的每一頁，都有老師的親手朱批。以前曾有某位先生的日譯資治通鑑稿本，請老師具名監修或合譯，但老師所期望的是更完美的譯本，所以婉言拒絕了他的請求。由此可見，老師對資治通鑑的一往情深了。

資治通鑑之文屬宋代之文，它的胡三省注則屬宋代之學，一般而言，宋代之學較前代更易了解，所以資治通鑑不僅是唐以前正史的縮本，而且也是解讀正史的必備經典。但是，以宋代學問來研究宋代學問，到底有其限界，因而，我希望專攻史學的後輩，利用本書來研讀資治通鑑，而我更期望，諸

位在深入研究之後，能有超越資治通鑑的著作呈現出來。

1960 年 10 月 20 日

於赴歐前

宮崎市定

凡 例

1. 本索引是 1950 年二月以油印本發行的「資治通鑑索引稿」再版，但在排列上作了若干變更，另外附有佐伯富編的「資治通鑑目錄」及主要版本對照表、總劃索引、四角號碼索引。
2. 本索引是將資治通鑑本文及胡三省注中的食貨、職官、選舉、兵制、地名（限於寫有地名發音、發生由來及小地名等特殊例子。）、塞外部族、外國、姓氏、諡法、宮殿、掌故、訓詁等有關名詞，標於各項目中。
3. 本索引是以發音式五十音順排列，爲了檢索方便，同一文字皆集於同一處；若爲同音，則由筆劃少的依序排列到筆劃多的；同音同劃者，則按照康熙字典的文字順序排列。
4. 各項目的發音，原則上按照漢音，但也有依照慣用音的例子。
5. 項目中的～記號，是表示此字和上記項目的字相同。
6. 所依據的底名是流傳最廣的山名本。
7. 23、10a、7，30、5b、10 分別表示 23 卷 10 頁表面的第 7 行，及 30 卷 5 頁背面的第 10 行。
8. 主要版本對照表是爲了無法使用山名本者的方便，而新編成的。在通鑑 294 卷中，以第 253 卷最長，將此作爲標準，山名本第 253 卷的各頁表背第 1 行（最初）及第七行（中央），可求出與之對應的四部備要本、古籍出版社排印本、伊勢津藩本爲第幾頁第幾行。例如，山名本的第 6 頁背面中央第 7 行（6b、7）的第一個字，是在四部備要本的第 8 頁背面第 7 行（8b、7），若是津藩本，則在第 12 頁表面第 3 行（12a、3）。山名本雖然每 6 行有一間隙以示出中間處，

但大抵都能用這種方法找出來。但在其他各卷，因為卷初及各年末處的空白取法互有不同，因而會稍有出入，這也是不得已的。

至於古籍出版社排印本，因為是以全書編排頁碼，各卷並未另編頁碼，使用此版本時，必須換算其頁數。也就是，將各卷的最初頁當作第1頁，以下依次為第2頁、第3頁。以第253卷為例，第1頁即通頁的8189頁，第12頁則是加上差額11的8200頁。此排印本每一行的字數比較多，所以各卷的出入相當大，甚至有相差二、三頁的例子，必須特別注意。使用上述以外的版本時，也可以按照這種方法，事先作張對照表，將會帶來許多方便。只要以山名本每半頁為13行、1行有26字、每卷卷首為六行的基礎計算即可，並非一件困難的事。

9. 本索引是由荒木敏一、岡本午一、愛宮松男、小畑龍雄、北山康夫、佐伯富、佐藤長、武田豐、中谷英雄共同製作成卡片（人文科學研究所藏），由佐伯將各卡片的標題項目分別標出卷頁表背，並加以補訂而成。負責將該索引和原卡片作校對工作的，則是池田誠和伊藤道治兩位先生。
10. 新版的原稿書寫、排列、校對，分別由東洋史研究會委員樞原郁、勝藤猛、狩野直禎、近藤秀樹、寺田隆信、森正夫、吉川忠夫、若松寬及東洋史研究所學生小野寺郁夫、谷口規矩雄、永田英正、堀川哲男、橫山裕男和鈴木千惠、山名玲子兩位小姐負責。
11. 四角號碼索引的製作得力於人文科學研究所平岡武夫教授及清水美智子小姐的協助。

新 版 の 序

本書の編者佐伯富教授たちの手によって、資治通鑑索引の編集が企てられていることを知ったのは今から20餘年も前のことであつた。そういうものが出来たなら嗚かし學界にとって便利なことであろうと考えて、私の同僚たちが後押しして、本書の稿本が印行されたのは、それから10餘年たった昭和25年のことである。この頃は日本が敗戦の痛手を蒙った直後のことであり、活字印刷にすることなどは思いもよらず、ザラ紙に油印で間にあわせるのがせいぜいであつた。それにも拘わらず、本書は學界から異常な歡迎を受け、別に大した廣告をするまでもなく、次第に捌けて行つて、賣切れたあとでも注文が重なり、ことわるのに苦しい思いをした程であつた。私自身もある大學から懇望されて、唯一の副本として控えておいたものを割愛した記憶がある。その後本書に對する要求は強まる一方なので、更に10年をへて漸く新版印刷の機會が到來したのである。幸いにハーバード・燕京研究所基金による東方學研究日本委員會の好意ある援助によって、いま本書が見ちがえるような立派な體裁となつて世に出ようとしているが、本書の來歴を知るものにとって、この新裝本の出現は心から喜びとするところであると共に、うたた感慨の情にたえないところでもある。

われらの恩師桑原隲藏先生は繰返し、たんねんに資治通鑑を読まれた。先生の龍大な藏書は先生の逝去後、あげて京大東洋史研究室に寄贈されたが、先生手澤本の山名本資治通鑑はお宅に家寶として留置きを願つてある。それには毎頁先生が朱墨で書入れを施していられる。嘗て某氏が資治通鑑國譯の稿本をもたらし、先生に監修、あるいは共譯の名を請われたことがあつた時も、先生は更に完全な日本語譯を望まざるあまり、これを拒却された。これはいかに先生が資治通鑑を愛せられたかを物語るものに外ならない。

資治通鑑の文は宋代の文であり、その胡三省注は宋代の學である。宋代の學は合理的で、わかりよい點が前代にまさっている。故に資治通鑑は單に唐以前の正史の縮本たるのみでなく、實に正史を解讀するための津梁でもある。ただ宋代の學問にはまた宋代の學問としての限界がある。私は史學を專攻する後生に對して、よく本書を利用して資治通鑑を読むと共に、讀んだ上は更に資治通鑑を超越してもらいたいことを望んでやまない。

昭和35年10月20日

渡歐を前にして

宮 崎 市 定

舊 版 の 序

資治通鑑につけられた胡三省の注釋は宋の理宗の寶祐四年（西紀 1256）ごろ着手され、一度脱稿を見たも、景炎元年（1277）彼の郷里である浙東地方が蒙古の伯顔軍の鐵蹄に蹂躪されたとき、不幸その稿本が失われたが、亂後銳意再製して元の世祖至元二十二年（1285）に至って完成されるまで、前後三十年を費した苦心の結晶である。

胡氏は史炤の通鑑釋文三十卷を始め、宋代の種々の注釋を参照利用したものはあるが、史炤の釋文の誤謬を一々訂正して自ら通鑑釋文辨誤十二卷を著している位で、舊注に對しては嚴正な批判を加えた上で採擇し、終始一貫正確を失わない注釋である。また至るところに、たとえば宋白の續通典の如き佚書を多く引用しあり、殊に唐末五代に關する部分は通鑑本文と共に根本資料としての價值を有する。その採擇するところは單に訓詁だけではなくて、すべて名物、制度、掌故、地名等について簡明で要を盡した解釋がつけられ、史學的注釋の模範とされているばかりでなく、特に三國志以下の歴代の正史にはほとんど注釋がつけられていないので、これらの正史を読む際には是非參照せねばならない貴重な書物である。

この中世史の研究者にとって寶庫ともいふべき通鑑胡三省注が二百九十四卷の通鑑本文の各所に散在しているために、容易に利用する方法がなかったことは、中國史を研究するものゝ遺憾とするところであつた。

人文科學研究所東方部に屬する東洋史の專攻者たちは資治通鑑班を組織して、隋紀、唐紀、五代紀の部分會讀するに際して、文學部の佐伯教授が同窓五名の協力により東方文化研究所の援助の下に、昭和十四年一應脱稿されたまゝ埋れていた資治通鑑本文並に胡注の索引の原稿を、至急利用する必要を感じたので、同氏に請うてそのまゝの形で稿本を油印に附することにした。宮崎、安部兩教授、藤枝助教が科學研究費を割捐され、平岡教授が唐代文集索引班の部員を挙げ科學研究費を割捐して印刷に協力された結果、短時日の間に懸案の通鑑索引の印刷を完了することが出來たことは望外の喜びである。佐伯教授始めこゝに協力下さった多數の同學の方々に感謝の微意を表したい。なおこの稿本は將來、通鑑班の事業の進行に伴って出來るだけ補訂を加え、また博雅の子の斧正を得て完好なものとして公刊したいと期している。

昭和 25 年 2 月

貝 塚 茂 樹

凡 例

- 1 本索引は昭和二十五年二月油印本にて刊行された「資治通鑑索引稿」の覆刻であるが、排列に多少の変更を加え、佐伯富編「資治通鑑目錄」及び主要版本對照表、總劃索引、四角號瑪索引を附したものである。
- 2 本索引は資治通鑑の本文並に胡三省の注につき、食貨、職官、選舉、兵制、地名（地名の發音、發生の由來を記せるもの並に小地名等特殊なものに限る）、塞外部族、外國、姓氏、諡法、宮殿、掌故、訓詁等に關する名辭の項目を標出した。
- 3 排列は發音式五十音順によったが、檢出に便ならしめるため同一文字は同一箇所に集めた。尙、同音のものは劃數の少いものより多いものへ、同音同劃のものは康熙字典の文字の排列に従った。
- 4 項目の發音は原則として漢音によったが、慣用音に従った所もある。
- 5 項目中～印はその文字が上掲項目の文字と同字なることを示す。
- 6 底本としては最も多く流布せる山名本に依據した。
- 7 23, 10a, 7. 30, 5b, 10 は夫々 23卷10丁表7行、30卷5丁裏10行を示す。
- 8 主要版本對照表 山名本を用いることのできない人の便宜を計つて新たに作成した。通鑑 294 卷の中、最も長いのは第 253 卷であるから、これを標準にとり、山名本第 253 卷の各丁表裏の第 1 行(最初)、第 7 行(中央)が、四部備要本、古籍出版社排印本、伊勢津藩本では第何丁第何行にあたるかを求めて對應させた。例えば山名本の第 6 丁裏中央の第 7 行目 (6 b, 7) の最初の文字は、四部備要本では第 8 丁裏第 7 行目 (8 b, 7)、津藩本では第 12 丁表第 3 行目 (12 a, 3) にでてくる。6 行毎に 1 回しかない目盛りだがその中間はこれによつて大凡の見當がたてられよう。但し、他の卷においては、卷初や各年末の空白の取り方などが互いに違つているため、更に少しずつ、ずれてくるのは已むを得ない。

古籍出版社排印本は全部が通し頁であり、各卷毎には頁付けが改まつていないから、これを用いるにはその都度、頁數を換算しなければならない。

即ち各巻の最初の頁を第1頁とし、以下順次に第2、第3と数えて行く。
例えば第253巻では、その第1頁とあるは通し頁8189頁であり、第12頁とあるは、それに差額11を加えた8200頁に當る。この排印本は1行に含む字数が多いため、巻によつてずれ方が非常に大きく、二三頁にも跨ることさえあるから注意を要する。以上の諸版以外の版本を使用されるには、このやり方にならつて、各自に豫め對照表を作つておかれると便利であろう。それには山名本が、毎半丁13行、行26字、毎巻巻首6行どりであることを基礎に計算すればよく、決して困難なことではない。

- 9 本索引は荒木敏一、岡本午一、愛宕松男、小畑龍雄、北山康夫、佐伯富、佐藤長、武田豊、中谷英雄が共同作成せるカードにつき（人文科學研究所藏）、佐伯が該カードの見出項目と卷丁表裏とを抽出書寫し、之に補訂を加えたものによつた。該索引と原カードとの校合は池田誠、伊藤道治兩氏の勞を煩わした。
- 10 新版に際して、原稿の書寫、排列、校合等は、東洋史研究會委員梅原郁、勝藤猛、狩野直禎、近藤秀樹、寺田隆信、森正夫、吉川忠夫、若松寛及び、東洋史研究室在籍の大學院學生小野寺郁夫、谷口規矩雄、永田英正、堀川哲男、横山裕男並に鈴木千恵、山名玲子兩嬢がこれに當つた。
- 11 四角號瑪索引の作製には人文科學研究所平岡武夫教授、清水美智子嬢の御厚意に與つた。

資治通鑑目錄

佐伯 富編

山名本冊數	卷數	紀名	帝王名	年	代
2	1	周紀 1	威烈王安烈顯愼赧王	23 — 24	(403 B.C.)
				1 — 26	
				1 — 7	
				1 — 48	
				1 — 6	
	2 3 4 5	2 3 4 5	威烈王安烈顯愼赧王	1 — 17	
				18 — 42	
				43 — 59	
3	6	秦紀 1	昭襄王 孝文王 莊襄王 始皇帝 二世皇帝	52 — 56秋	(255 B.C.)
				1(十月己亥即位)	
				1 — 3.5丙午	
				1 — 19.3	
				20 — 37.9	
	7 8 9 10	2 3 漢紀 1 2	高祖	1.10戊寅 — 1.9	
				2.10 — 3.9	
				1.10 — 2.9	
				3.10 — 4.9	
4	11 12 13 14	3 4 5 6	惠高文 皇帝 后帝	5.10 — 7.4	(202 B.C.)
				8冬 — 12.5	
				1.12 — 7.9	
				1冬 — 8.9	
				1.10 — 2.9	
5	15	7	景帝	前 3.10 — 10冬	(169 B.C.)
				前 11.11 — 16.9	
				後 1.10 — 7.9	
				1.10 — 2.8	
	16	8	景帝	前 3.10 — 7.4	
				中 1.4 — 6.7	
				後 1.1 — 3.3	
				建元 1.10 — 6.8	
	17	9	武帝		

山名本冊數	卷數	紀名	帝王名	年	代
5	18	漢紀 9 10	武帝	元光 1.11 — 7 2.10 — 6秋 元朔 1.11 — 4夏	
6	19 20 21 22 23	11 12 13 14 15	昭帝	5.11 — 6.6 (124 B.C.) 元狩 1.10 — 4夏 5.3 — 6.9 元鼎 1.5 — 6春 元封 1.10 — 秋 2.10 — 6秋 太初 1.10 — 4冬 天漢 1.1 — 2.5 3.2 — 4.4 太始 1.1 — 4.12 征和 1.1 — 4.8 後元 1.1 — 2冬 始元 1夏 — 6.7 元鳳 1春 — 6.11	
7	24 25 26 27 28	16 17 18 19 20	宣帝	元平 1.2 — 11 (74 B.C.) 本始 1春 — 4.5 地節 1.1 — 2.4 3.3 — 4.12 元康 1.1 — 4.8 神爵 1.1 — 3.8 4.2 — 11 五鳳 1.1 — 4.4 甘露 1.1 — 4.10 黃龍 1.1 — 12 初元 1.1 — 5.12 永光 1.1 — 2.11	
8	29 30 31	21 22 23	成帝	3.2 — 5.12 (41 B.C.) 建昭 1.1 — 5.7 竟寧 1.1 — 7 建始 1.1 — 4.11 河平 1春 — 4.6 陽朔 1.2 — 2.8 3.3 — 4.閏9 鴻嘉 1.1 — 4秋 永始 1.1 — 3.12	

資治通鑑目錄

山名本冊數	卷數	紀名	帝王名	年	代
8	32	漢紀 24	成帝	永始 4. 1 — 11 元延 1. 1 — 4. 3 綏和 1. 1 — 12 2. 1 — 10	
	33	25	哀帝	建平 1. 1 — 10	
9	34	26		2. 1 — 4. 8	(5 B.C.)
	35	27	平帝	元壽 1. 1 — 2.10 元始 1. 1 — 2. 9 3春 — 5.12	
	36	28	王莽	居攝 1. 1 — 2.12 初始 1春 (十一月改元) — 12 始建國 1. 1 (去年十二月, 莽改元, 以十一月爲歲首) — 5.11 天鳳 1. 1 — 7	
10	38	30		2. 2 — 6春	(15)
	39	31	淮陽王	地皇 1. 1 — 3.12	
	40	32	光武帝	更始 1. 1 (二月改元) — 2冬 建武 1. 1 (六月改元) — 2.12 3. 1 — 5.12	
	41	33			
11	42	34		6. 1 — 11.12	(30)
	43	35		12. 1 — 22.10 23. 1 — 31. 5	
	44	36	明帝	中元 1. 1 — 2.11 永平 1. 1 — 3.10 4春 — 18.11	
	45	37			
12	46	38	章帝	建初 1. 1 — 8.12 元和 1. 閏1(八月改元) — 12 2. 1 — 3. 9	(76)
	47	39	和帝	章和 1. 1 (七月改元) — 2.10 永元 1春 — 3.12 4. 1 — 16.11	
	48	40	殤帝	元興 1春 (四月改元) — 12	
	49	41	安帝	延平 1. 1 — 12 永初 1. 1 — 7秋 元初 1. 1 — 2.12	
13	50	42		3. 1 — 6.12	(116)
				永寧 1. 3 (四月改元) — 12 建光 1春 (七月改元) — 12	

山名 冊本 數	卷 數	紀 名	帝 王 名	年	代
13	50 51 52 53	漢 紀 42 43 44 45	安 帝 順 帝 冲 帝 質 帝 桓 帝	延 光 1. 3(三月改元)—3.11 4. 2 — 4.12 永 建 1. 1 — 6. 9 陽 嘉 1. 1 — 2. 8 3. 4 — 4.12 永 和 1. 1 — 6.11 漢 安 1. 1 — 2.11 建 康 1. 1(四月改元)— 12 永 嘉 1. 1 — 11 本 初 1. 4 — 10 建 和 1. 1 — 3.10 和 平 1. 1 — 7 元 嘉 1. 1 — 2.12 永 興 1. 3(四月改元)—2.11 永 壽 1. 1 — 2.12	
14	54 55 56 57 58	46 47 48 49 50	 靈 帝	3. 1 — 11 延 熹 1. 5(六月改元)—6.12 7. 2 — 9.12 永 康 1. 1(六月改元)— 12 建 寧 1. 1 — 4.10 熹 平 1. 1 — 6.12 光 和 1. 1(三月改元)—3.12 4. 1 — 6秋 中 平 1春 (十二月改元)—4.11	(157)
15	59 60 61 62 63	51 52 53 54 55	 獻 帝	5. 1 — 6.12 初 平 1. 1 — 冬 2. 1 — 4.12 興 平 1. 1 — 2.12 建 安 1. 1 — 3.12 4春 — 5.10	(188)
16	64 65 66 67	56 57 58 59		6. 3 — 10.10 11. 1 — 13.12 14. 3 — 18.11 19春 — 21.11	(201)
17	68 69 70	60 魏 紀 1 2	文 帝	22. 1 — 24.12 黃 初 1. 1(十月改元)—3.11 4. 1 — 7.12	(217)